ちゃーりーと姫

森小市旬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ちゃーりーと姫

【Ｎコード】
Ｎ３９１１Ａ

【作者名】
森小市旬

【あらすじ】
真夏の夜、Ｔ県Ｓ区の公園で『アレ』と『出会う』ために待ち続ける少年。その公園で一人の少女に謎の人物からの着信。『水戸のＫＯ－ＭＯＮ様』の着歌に乗せ、少年と少女は出会い、喜劇は幕を開けた。

壱話：ぼーいみーつがーる？

「この暑さは後2週間は続くでしょう。皆さん、熱射病には十分注意してー…」
腰にぶら下げたラジオから、いかにも公共放送という感じの声が、この夏の猛暑について淡々と語っている。少年はラジオと共にぶら下げている温度計を手に取り、うんざりした顔をした。
ここは、都会のど真ん中、T県S区の公園。その公園のシンボルである噴水の前で、少年は何かを待っている様子だった。「くそっ…32℃だぁ！？どーりでアチィわけだよ。」
ぼさぼさの黒髪に、不釣り合いなほど大きな眼鏡、奇妙なシマシマ模様のTシャツにダブダブのジーンズ、おまけに便所下駄を履いた、いかにも怪しい恰好の少年は、温度計から手を離し、一つ悪態をつくと、とりあえず立ち上がった。
「あ、もう夜か…」
と、そこで気付いたように少年は呟いた。たしかに、見渡せば辺りを歩く人はおらず、腹も減った、それよりも何よりも、暗い。
何時からここで『アレ』を待っているのだろうか。そして、いつまで待てば、『出会う』ことが出来るのだろうか。
「腹…減ったし、コンビニ行くか。」
蛙がつぶれながら鳴いてるような、情けない音を響かせながら、少年はカランカランと歩き始めた。
しばらく歩くと公園の出口が見てきた…と、その時、一人の女の子が走って公園に入ってくる。高校生くらいだろうか。
どうせベタベタな設定で、終電か門限に間に合わないか見たいドラマでもあって、この夜は危ないと噂ムンムンのココを横切るつもりなんだろ…とか思いながら、別段気にする事なく、至って普通に少女とすれ違う。
普通の小説やドラマなんかなら、ここで何かしら出会いやドタバタ

愛憎劇があるんだろうな…
少年は普通に少女とすれ違うだけの自分に、ちょっと切なくなりながら、煙草を取りだし火をつけた。しかし、こんな時に限って普通の『出会い』は訪れるものだった。
少年が煙草を一口吸い、フーっと煙を吐き出すと同時に、腰にぶら下げているラジオから
「22時をお知らせします、ピッポー」
と時報が鳴った…そして、次の瞬間……
『じーんせーい天国あーりゃー地獄はなーいーさぁ～♪』
と、はるか後方、先ほどすれ違った少女が駆けて行った方角から、今をトキメク時代劇、『水戸のKO－MON様』のテーマが、少年の耳に聞こえて来た。
「……ありえねぇ」
少年はつぶやき、もう一口煙草を吸うと、静かに後ろを振り返った。
……カラン…
真夏の夜、公園の静寂の中で、少年が履く便所下駄の足音が一つした後、少年の姿は忽然と消えていた。

その時、鞄の中から聞こえる『水戸のKO－MON様』のテーマに、少女は足を止めていた。そして、鞄の中からケータイを取り出すと、着信の相手を確かめ通話ボタンを押した。
どこかの高校の制服であろう…紺のブレザーにスカート、Yシャツを第三ボタンまで開けた、ショートカットの活発そうな目をした少女は、電話に出ると同時に、物凄い勢いで怒鳴り始めた。
「ちょっと！何でこんな時間に電話してくるわけ！？」
『そんなに怒鳴るなよ…それより、あの約束はどうなってー……』
電話の向こうから、弱々しいガラガラ声が聞こえてくる。「あー、あれね、全っ然駄目！ってか無理！マジ有り得ない！！何なのアイツは！？だいだいさぁ、私の仕事はー……」
『アイツがブツだよ。』

それを聞いた瞬間、少女は目を見開き、電話口に向かって聞き返した。
「え…？何？もう一回言ってくんない？」
『だからー、アイツが例のブツー…ぷつっ…プー…プー…プー
「！？」
突然切れた電話に、少女は驚いた……いや、次の瞬間には自分の電話を切った…違う、『ケータイの電波を完全に遮った』人影を『見上げていた』。
ボサボサ髪にでかい眼鏡、シマシマのTシャツにダブダブジーンズ、そして、便所下駄を履き、間違いなく空中で逆さに立ち、満面の笑顔で自分を『見上げている』、そう歳が変わらないであろう少年を。

こうして、お互い名も知らない少年と少女は、いや、少年は『アレ』と『出会った』。
そして、少女は不運にも『アレ』として少年に『出会われて』しまった。真夏の夜、T県S区のとある公園、まさに、その公園のシンボルである噴水の前であった。
こうして、少年と少女の、そして、まだ見ぬ数人の可哀相な人間を巻き込む喜劇が始りの時を迎え、それを知ってか知らずか、少年の腰のラジオからは、落語家が語る、まさに喜劇としか言いようの無い小話が流れ始めた…

壱話：ぼーいみーつがーる？（後書き）

読み返してみるととりとめがなく、突拍子もなく、何より構成がめちゃくちゃですが、今後続きを書く中で、誰か一人でも最後まで読み続けてくれたら、このこっぱずかしさも少しは良くなるのかなぁ…とか思ってます。でも壱話目にして大事なとこが２つくらいしか書かれてない…

弐話：るっきんぐふぉー

真夏の夜、T県S区の公園、公園のシンボルである噴水の前で、少年は自分を『見上げる』少女を、『見上げていた』。
まさに空中に逆さに立っている少年は、少女の驚いた顔を、満面の笑顔で確認すると、
「お前、『アレ』…だろ？」
と少女に向かい質問をした。
「なんのことよ？」
少女は眉間にシワを寄せ、少年に答える。すると少年は、ただでさえボサボサの頭を右手でボリボリかくと、少女に向かい言った。
「やっと会えたのにさぁ、その態度はつれないんじゃない？」
少女の表情が、より険しくなる。
「だから、何言ってんのよって聞いてんの。ってか、そんなトコに立ってないで、降りて来て話したら？」
「ほら、やっぱりそうだ…俺が空に立っていても、驚きはしても逃げたりうろたえたりしない。」
そう言うと、少年は空中を軽く蹴った。次の瞬間には、カラン、という音と共に地面に降り立っていた。
「それにさっきの着うた…お前は間違いなく『アレ』だな……いや、少なくとも『アレ』候補か。」
少年はそうつぶやいた後、少女の前に立った。
「……意味分かんない」
そう言うと少女はその場を立ち去ろうとした。
「白山姫子…ねぇ」
少女はドキリとして少年の方を向く。すると、少年の右手には間違いなく自分の生徒手帳が握られていた。少女―…白山姫子の持ち物の中で唯一自身の証明となる物であり、鞄の一番奥に、たとえ『仕事』の最中でも決して落とすことがないようしまっていたハズなの

に…
「なんかぐだぐだな名前だな」
と少年が言い、ケタケタ笑い始めると同時に、少女の顔から表情が消えた―…
―鞄には開けられた痕跡が無い…一体どうやって私の生徒手帳を？
―こいつは何者？私の『仕事』を知っていて近づいて来たの？
―いや、私の名前を知らなかった様子から…それは無い。
―それより、おそらくこいつは『ドライバ』…しかも、かなり強力な…
―なら、コイツが何者でも躊躇している余裕は無い……
姫子は一通り思考を廻らせると、一歩前に踏み出した。そこからの動作は正確であった。それこそ精密機械の様に、すばやく細かい動きで少年の右手と首筋をつかむと一気に最小限の力で地面に押し倒し、少年の上に馬乗りになった。
「―……っつ！」
少年は一瞬何が起きたか理解できなかった様子であったが、すぐに自分が押し倒された事を知ると、少女の顔を見つめながら、また、満面の笑みを浮かべた。姫子は自分を見上げる少年の右手からすばやく生徒手帳を引き抜くと、首から手を離し立ち上がった。そして、
「アンタが何者だか知らないけど、今後私に近づかないで。もし私の半径２５ｍ以内に近づいてみな、ひどい目にあわせるよ…」
と言うなり、少年の腹を思いっきり踏み付けた。「ぷげっ！」
少年は奇妙な声をあげると同時に、腹を押さえて地面を転げ回った。
その様子を確認した姫子は、公園の出口へとむかい歩き始めた。
姫子がその場を去って5分くらいたっただろうか。少年は、相変わらず地面にうずくまっていた…が、突然、そのうずくまった状態のままノーモーションで空中へ飛び上がり、そして、夜の公園の静寂の中、カランっという音を響かせ地面に降り立った。
「ふひぃー…、何って女だよぉ」

少年は姫子が去って云った方向を見て呟いた。そして、ジーンズからケータイを取り出すし
「あー、よかったぁ…ケータイ、壊れてねぇや。」
と呟くと、あるところに電話をかけた。
『もしもーし』
電話の向こうから聞こえて来たのは、妙に甘ったるい男の声だった。
「お前さぁ、その悪趣味な変声器使うのやめろって何回言ったら分かるんだよ？」
少年は電話の向こうにいる相手にそう悪態をつくと、
「まぁいいよ、それより、『アレ』っぽいの見つけたぜ。」
そう言うと、
『えぇ～、マジでぇ？すっげぇ！ＫＯ－ＭＯＮ様の着うたの女！？本当にいたんだぁ』
「な……お前なぁ、本当にいたんだって…確かかどーかも分かんない情報を俺に寄越してたっての！？」
『まーまー、しょーがねぇじゃん。最近俺の『ドライバ』調子悪いんだし…それに、いたんでしょ？確かにさ。』
その男の声に、少年の顔から笑顔が消えた。
「『Ｓ区の公園』、『ＫＯ－ＭＯＮ様の着うた』に、『ドライバ』…ま、ほぼ間違いなく『アレ』でしょ。やっと見つけたよ……」
少年は、いつの間にか空のてっぺんまで昇っていた月を見上げ、呟いた。
「この雨水鎖仁の為だけの『三戒相姫』を…」
『おめでとう、そして……』
電話の男が何かを言い終わると、少年・鎖仁は電話を切った。
―カランっ……

こうして、公園内のどこからも、鎖仁の姿は消えた……

弐話：るっきんぐふぉー（後書き）

ラジオと温度計は壊れなかったのかなぁ？なんて思う第弐話です…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3911a/

ちゃーりーと姫

2010年10月28日06時57分発行